

目 次

中国四国支部の活動状況

支部長語る／君嶋英彦

中国四国地方の特徴、支部活動状況／佐伯祐治

プロジェクト・レポート

瀬戸大橋と製作技術／林義信

超高温材料研究センターの活動状況／榎本弘毅

随想

和鋼博物館見学記／辛島一生

たたらからヤスキハガネへ／奥野利夫

呉海軍工廠製鋼部の回顧／堀川一男

製鉄所の立地と地域社会との共存共栄／佐藤健太郎

最新技術

ステンレス鋼の双ロール法ストリップ製造／竹内英磨

Ti-TiN傾斜機能型耐熱材料／荒木孝雄

支部行事参加者の声

女子学生の声「支部講演大会に参加して」／井戸あゆち

「ものづくり教育を考える会」製鉄所見学と懇談会／佐伯祐治

川崎製鉄株水島製鉄所見学を終えて／白川聖子

鉄はすでにインテリジェントマテリアル—彼らに知らせたい鉄の魅力と可能性—／森久美子

あとがき

中国四国支部の活動状況

支部長語る



君嶋 英彦

(川崎製鉄株) 専務取締役水島製鉄所所長

平成5、6年度支部長に就任した君嶋英彦第18代支部長は、次のようにその抱負を語った。

中国四国地方は、鉄鋼業においても粗鋼全国シェア21.4%(平成4年度)を占めるなど、この地方だけでも大きな経済圏であるが、それを広げて瀬戸内海圏としてみると神戸、加古川、広畑、大分、福岡も入り、平成4年度全国シェアが造船53%、粗

鋼38%、自動車(ノックダウン含まず、日産九州約30万台含む)約20%、を占める大経済圏である。中国地方はその交流の中心に位置する。

政府も示しているように、工業と生活を一極集中でなく、もっと地方に分散化していかなければならない。そこでは工業と生活が一致することが望ましい。

このためには、頭である技術部門ももっと集約させて、若い人が面白くやり甲斐のある仕事をし、楽しく生き生きと生活できる魅力ある地域をつくっていかなくてはならない。そして、鉄鋼業で実施している「瀬戸内リーグ」のような形の交流を、多くの他分野技術者との交流にまで対象を拡大・強化して、その交流のなかで鉄鋼技術・製品などを見直し、共同もしくは単独の研究開発へ繋いでいくことが重要である。すなわち、地域での競争と協調及び頭脳と手足をうまくマッチさせていくことが肝要である。

当支部はこの考え方を基本に活動を展開していきたい。



中国四国地方の特徴

佐伯 祐治

(川崎製鉄株) 水島製鉄所

この地方、特に吉備と出雲は、古くから、採鉄に恵まれ古代製鉄の拠点として栄え、それを経済的基盤として吉備文化圏と出雲文化圏を形成していた。多くの古代製鉄遺跡があるが、その中で、日本最古の弥生時代(6世紀後半から7世紀初め)のものといわれる「千引かなくろ谷」製鉄遺跡がある。また、古今集に「真金吹く吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」とうたわれているが、吉備の国の枕言葉は『真金吹く』である。

この『真金』こそが鉄製錬を意味するといわれている。

この地方は、「たたら製鉄」が「高炉製鉄」に生産量で抜かれる明治24年(1891年)まで、日本の総製鉄生産量の6~7割を占めていた。以降、「たたら製鉄」は姿を消すが、戦後、大型一貫製鉄所建設がこの地に始まり、昭和48年には高炉11基が稼働し、2500万トン/年(21%)の名実ともに我が国の製鉄基地に返り咲いた(図1)。

昭和63年4月には、本四連絡橋3ルートの中の瀬戸大橋が鉄の構造物の最高傑作として開通した。明治22年(1889年)、「大久保謙之丞(香川県議)が塩飽諸島を中心に連絡橋を架けることを初めて提唱してから一世紀」の大事業であった。これによって、名実ともに中国と四国の一体化が進んだ。